

帰国子女・社会人入試 小論文問題

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
2. この問題冊子は、この表紙を含めて3ページです。
3. 問題の「問1」、「問2」すべてに解答すること。
4. 解答用紙は全部で2枚、下書き用紙が全部で2枚あります。
5. 解答は解答用紙に横書きとし、句読点及び段落の字下げ、改行によって生じた空白も字数に含め、指定された字数内にまとめること。
6. 受験番号は、解答用紙の指定欄に記入すること。
7. 解答用紙2枚を提出し、問題冊子・下書き用紙は、試験終了後持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外は受理しません。
8. 試験中に、問題冊紙の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題 次の文章を読んで、後の二つの問いに答えなさい。

「教える」という行為は、どの文脈にあらうとも、学ぶ側が獲得してくれることで実現する。教える側が、どれだけそれがわかっていようと、自分にその能力があらうと、学ぶ側がそれを獲得し身につけてくれなければ、教えたことにはならない。教える側が、どれだけ深くわかっているとか、どれだけ準備したとか、どんなに努力したということでも決まらない。そういうことでは自己満足できないのである。

したがって教える者は、学ぶ側の状況・反応につねに敏感でなければならない。そして準備・計画は重要だが、その時どきの学ぶ側の反応によってやり方を柔軟に変え、即興で「教える」行為を進めなければならない。神ならぬ身の人間が、他の人間に何事かをわかってもらおうという「教える」行為は、もともと相手頼みの面を含んだ難しさを本質的にはらんでいる。

(中略)

教える仕事は、知識・規範・価値の「伝達・獲得」にかかわっている。それが通常の生活や労働の展開に含まれて、その知識・規範・価値が生きて働き活用されている場で行われるのと違って、学校では世の中に存在するあまたの諸知識・規範・価値の中から「これこそ次の時代を生きる世代に学んで身に付けてほしい」というものが選ばれ、それを教えるのにふさわしい形に再配置(=再文脈化;re-contextualization)することで、教える活動が行われている。だから、その知識が元来働いている生活・労働の文脈から切り離された場で教えなければならない。その分「伝達・獲得」の順序・過程・手段などをあらかじめ工夫・計画することは可能であるが、どれだけ工夫し計画しても、そのシナリオ通りにことがらが進行するとは限らない。またたとえ教える側が妥当な知識・規範・価値を持っていてそれが学習者に「適切に」提示され語られたとしても、学習主体の側がそれを「獲得」しない限り、結局その「適切性」は実現せず、「伝達」もされない。

だから(マニュアル化できる面もあるが)マニュアル化し切れないのが「教える」仕事である。

(出典 久富善之『日本の教師、その12章』新日本出版社、2017年、一部改変。)

問1 筆者の主張する教える行為と教える仕事の相違点について、400字以上600字以内で述べなさい。(40点)

問2 筆者の主張する教える仕事の難しさに、あなたはどうか対処しようと考えますか。600字以上800字以内で述べなさい。(60点)